る義務でしかない。実際、授業の中止後、子どもたちのニワトリに対する気持ちが切れてしまい、えさやり当番の子どもに大勢の級友が付いていく光景は見られなくなってしまったという。

こうした授業を五年生で体験させるのは早すぎるのだろうか？　筆者はそうは思わない。子どもの社会認識は、九歳頃を境に大きな飛躍を遂げる。それ以前は事実上、家庭・親戚・近隣・学校など、顔の見える関係が、子どもにとって世界のすべてであった。ところがそうした関係の外側には「社会」が厳然と存在し、自分たちの周囲の人間関係も、社会の網の目の一分肢に過ぎないと自覚できるのが九歳前後なのだ。つまり小学校三年生と五年生では、知識量にそれほど大きな差はないが、質には大きな飛躍があるのだ。逆に小学五年生と高校生では、知識量の開きは大きいが、その質に違いがあるわけではない。その意味で、食料生産・流通のメカニズムを十分理解している五年生は、こうした授業に取り組むには決して早すぎることはない。

また学校では例はないものの、アウトドア関係の任意団体では、小学生による屠畜体験も行われている。ボーイスカウトのリーダー章には、生きたニワトリかウサギを解体して二種以上の料理を創ることが謳われていた（入手困難のため、七七年に「生きた」ははずされた）。だからボーイスカウトのリーダーの中には、小学校の時に屠畜体験を経てきた人がたくさんいるし、そうしたリーダーたちが同様のプログラムを提供している例は多いのだ。

教育長の責任は重大

中止決定の責任者は、橋本尚志教育長である。橋本教育長は、新聞紙面や町議会の答弁で、「子どもの賛否が半々なのに、実施を強行するのはおかしい」と主張している。しかしこれは理由になっていない。たとえ子どもが尻込みしても、大人として、取り組ませなければならない学習はたくさんあるはずだ。橋本氏は子どもの半数が嫌がったら、掃除を延期するのか？　持久走を中止するのだろうか？

さらに橋本氏が「賛否半々」と言っている根拠は、前月末の時点での子どもの声を掲載した学級通信で、その後、子ども同士や家族との討論がそうとう煮詰まっていたことはすでに述べたとおりだ。それを検討せずに中止命令を出したことも、拙速のそしりを免れない。橋本氏はあの時、すぐに学校に出向き、N子先生や子どもたちの話を直接じっくり聞けばよかったのだ。役場から学校まで車で五分とかからないのだから。

いずれにせよ校長も了解して計画され、半年間もの実践を、教育長が電話一本でつぶしたこと自体、言語道断である。

雄物川町のケースは、実践計画が綿密で配慮が行き届いていたという意味でも、中止の経緯が正常ではなかったという意味でも、本当に残念であった。両論併記のあいまいな議論で済ませておくと、二度とこうした授業を計画できなくなってしまう。今回の件では実践者側には何の落ち度もなかったことを指摘し、こうした挑戦的な授業を計画される先生が次々と出現することを期待して、稿を閉じたい。

連載
スポーツで語る新世紀
玉木正之
第10回
ゲスト：
山本英一郎
（財団法人日本野球連盟会長）

日本野球のプロ・アマ「大統合」は可能か？

日本の野球はどうなる？　どうすればいいのか？　と真剣に考えている人が、いったい何処にいるだろう？　日本野球界の頂点に立つプロ野球のコミッショナー、セ・パ両リーグの会長は、球団オーナーの傀儡（かいらい）にすぎず、オーナーや球団関係者は、親会社の利益を追い求めるのみ。目先の勝敗に一喜一憂するだけで、「改革」とは口先ばかり。既得権益を「死守」することに躍起となっている。

なにやら、どこかの「与党政党」にそっくりの構造。ならば「野党」に期待しないわけにはいかない。といっても、日本のアマチュア球界は、かつては球界の「大与党」として、職業（プロ）野球を見下す存在だった。

しかし、いまや、日本野球はプロの天下。プロが動かなければ、オリンピックも「改革」も、ままならない。そんななかで、「与党」時代も熟知し、「野党」となったアマ球界に長く君臨し、「アマ球界のドン」とも呼ばれた人物が、八二歳の長老・日本野球連盟会長の山本英一郎氏である。

大学野球、都市対抗野球の全盛時から、国際大会の開催される今日まで、時代の変遷とともに、高校野球、大学野球、職業野球の栄枯盛衰を眺め続けた人物は、過去をどのように見つめ、未来の日本野球の青写真を、どのように描いているのだろうか？

やまもと・えいいちろう…1919年、岡山県生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。台北一中（甲子園に2度出場）、慶應、鐘紡でプレー。東京六大学、高校野球の審判員を務め、また、内外のアマチュア野球組織の役員を歴任。97年野球殿堂入り。現在、日本野球連盟、全日本アマチュア野球連盟、アジア野球連盟の各会長および国際野球連盟第一副会長。

オーガニゼーションは一緒に

——プロ野球の人気凋落、企業野球部の廃部や休部、オリンピックへのプロ参加問題とプロ・アマ交流問題等々、日本の野球界には問題が噴出しています。

山本 それらは我々が真剣に考えなければいけない問題です。今の日本の野球組織は、楽しむ部分とビジネスの部分、いわゆるアマチュアとプロに分かれてますが、やることは同じ野球なんだから、僕は、オーガニゼーションは一緒にならなきゃならないと思ってる。

——日本野球連盟として？

山本 我々の組織が全日本アマチュア野球連盟で、プロ野球側が社団法人日本野球機構ですから、両者を併せて、全日本野球連合にする。

——サッカーはプロもアマも同じ組織ですよね。

山本 サッカーにできて野球になぜできないんだという反論があるけど、明治時代に伝播したスポーツのなかで、野球は日本でいちばん人気が出て、大学野球、中等学校野球、職業野球など、いろんな組織が早く生まれ、各自独立して育った。で、日本人の悪い癖で、それぞれが城を築いてしまった。その城を、時代が変わったのに、いまだに破らんのですよ。

——日本の野球界は、下はリトル・リーグ、ボーイズ・リーグ、中学野球から、高校野球、大学野球、社会人野球、プロ野球と、組織が分断されてますね。

山本 そう。法人格をとってないところもあるけれど、だいたい独立しているから、なかなか一本になれない。日本人の気質。島国根性ですよ。

——Jリーグの川淵チェアマンは、「野球を反面教師として、サッカーはいい組織ができた」と言われてますが。

山本 川淵君とはJリーグ誕生前に何度も話し合った。その頃から僕は、今のままでは野球は駄目だと思ってた。企業スポーツの衰退……という言葉が適切かどうかは別として、そういう状況のなかで新しい組織を創らないと駄目だと考えていた。それは、地域と密着したクラブ。だから、今のJリーグのあり方が、僕の考えと同じ。一企業が選手全員を社員として抱えたり、自分の懐のカネで運営するのでなく、何社かがスポンサーになって、さらに地域住民や地方自治体が株主となってクラブを運営する。

僕は、スポーツとはそういう組織であるべきだと思ってますよ。

——その考えはJリーグがきっかけに？

山本 いや、そうじゃない。野球を五輪の種目にしようと動いた頃から、そういう考えを実行に移したいと思っていた。

——野球を五輪種目に、という動きは、山本さんをはじめとする日本の「アマ球界」が中心になった運動でしたよね。

山本 野球がオリンピックのエキジビションゲームに採択されたのは八四年のロサンゼルス大会です。そのときサッカーなどの他の種目では、すでにオリンピックにプロが参加していた。だから当然、いずれ野球もプロが参加するようになると思っていたけれど、日本のプロとアマの組織を統一してからでは手遅れになるから、まずは五輪の種目にして、アマチュアだけでロスの大会に参加することを急いだんです。そして八八年のソウル大会にも、野茂や古田がアマとして参加して、九二年のバルセロナ大会からは正式種目になり、二〇〇〇年のシドニーからプロが参加するようになった。

——そしてシドニーで日本はメダルを逃し、問題が噴出したわけですが……。

山本 正直いってちょっと見通しが甘かったと反省している。もう少し早くプロアマの統合は可能だと思ってたんだが。

——組織が統一できないのは日本人の気質とおっしゃいましたが、マスメディアが絡んでいることも原因では？

山本 そうです。おっしゃるとおりです。

——プロは読売、高校野球は朝日と毎日、社会人は毎日と、それぞれに「先取得権」という形で……。

山本 ただね、それらがスタートした明治末期から大正、昭和初期という時代は、日本は貧乏国だったわけで、スポーツを奨励し、発展させるのに、朝日、毎日、読売が旗を振ってくれた。援助もし、宣伝もしてくれた。その功績は大いに評価すべきだと思うんです。

——それは私も同意見です。ただ今日では、メディアの力が強大すぎて、野球界全体の発展を阻害しているのでは？

山本 そう。時代が変わったから。かつてはメディアの善意で効果があったけれど、現在の問題は、メディアも株式会社であり、一企業だということです。なぜ一企業が大会を仕切ったり、運営を独占するのか。それは、競技団体が中心になってやるべきことだ、というのが僕の考えです。だから僕は、朝日、毎日の独善的なやり方に反対だったから、甲子園大会と縁を切った。

問題山積の高校・大学野球

——高校野球には問題が山積みですね。

山本 自惚れてるんですよ。自負心も強い。それにメディアが二つもついてるから。戦前の中学野球時代から人気があって、野球をやる選手は誰もが甲子園を目指す。僕も甲子園には二度出ていますが、時代が変わったなら、やっぱり変わらなきゃ。

高校野球を教育だということなんぞ、おこがましいと思うんですよ。智育、徳育、体育のうち、日本人としていい子孫を残すために身体を丈夫にしようというのが体育で、どの学校スポーツも貢献しているのに、野球だけが特別に教育の一環であるなんて主張したら、ほかのスポーツ団体の人が怒りますよ。それを朝日や毎日が、表現としてある時期盛んに使って、今もその考えが残ってる。子供の教育なんて、野球だけでできるものじゃないですよ。そもそも高校野球は課外スポーツです。授業じゃないんだ。

——最近、甲子園大会

たまき・まさゆき…1952年、京都生まれ。3月末に外国人記者クラブに招かれ、米国のスポーツは米国の組織に参加しなければ「世界一」と認められないという「米国原理主義」を反映している、と演説。サッカーは「南米やアフリカ諸国でも世界一になれる」。野球も、いつかはサッカーのような「国際性」を獲得するのか？

の前に投手の肩や肘を中心に、選手のメディカル・チェックを行うようになりましたが、じつは、すでに回復不可能なほど壊れている投手が少なくないそうです。が、どうせ回復不可能なら甲子園で思い出をつくりなさい、というケースもあると聞きました。

山本 野球以下すべての日本のスポーツが、根性とハード・トレーニングで鍛えるというスタイルをとってきた弊害です。だからメディカル・チェックを始めたのはけっして悪いことじゃないけれど、大会直前にやっても何の効果もない。「一試合に投手を必ず二人使うこと」というようなルールを決めないと。

――高校生の投手は一試合五〇球まで、といったルールは不可能ですか？

山本 できますよ。本当に子供のことを思えばね。リトルリーグやシニアリーグでは、投げすぎを回避させる世界的なルールもあるし、世界連盟の少年の大会では九回投げた投手は翌日登板してはいけないということを、我々も指摘しています。

――世界連盟の大会というのは？

山本 野球でも、アンダー18、アンダー15という世界大会があるんです。サッカーと同じように、夏休みの期間に。ところが日本は唯我独尊で、八月は甲子園、と金科玉条のように守っていて、国際大会に選手を出さない。国内のことしか頭になく、国際性のかけらもない。韓国、台湾、オーストラリアの野球が、近年めきめき技術を伸ばしているのは、高校生の段階で国際大会にどんどん出ているからですよ。かつて韓国は日本に20対0くらいで負けていたのに、すでに高校レベルで追いつき、プロレベルでも追いつきつつあるのは、若いときから国際大会を経験してるからです。

――それは、私も不覚にして見落としていました。サッカーがジュニア・ユースやユースの世界大会に出場せず、なのにオリンピックだワールドカップだと騒げば、猛烈な批判が出るでしょうね。

山本 そう。スポーツは若年層から年代別に育てあげないと、絶対にレベルが上がらない。

――しかし、野球のユースの国際大会は、知らない人が多いでしょうね。メディアがまったく報道しませんから。

山本 知らないのは日本人だけですよ。メディアは甲子園を騒いで、国際大会をシャットアウトしてるんだから。メディアのなかには、そういう若年層の育成のための国際大会が重要だと、将来のオリンピックに目を向けて構造的な問題を論じることのできる人間もいる。だがプロ野球のなかにはいない。アマチュア野球のなかでも、そういうことをいえるのはたくさんはいない。

――高野連は、プロの指導を禁止してますよね。元プロ野球選手の父親は、息子に対して指導できない。

山本 あれはおかしいなあ(笑)。かつて高校生や大学生が在学中にプロに引き抜かれたとか、アマの選手がプロ球団と二重契約してもめたとか、そんな昔とは時代が違うんだから。

――かつては大学野球も国際大会を拒否していましたよね。

山本 そうです。

――巨人の原監督が東海大学時代、初めて大学生としてインター・コンチネンタル・カップ(世界アマチュア野球選手権。現在のワールドカップ)の日本代表選手として、ただ一人参加したのを憶えてますが……。

山本 一九八〇年に日本で開催したときでしたね。

――そのとき、東京六大学野球の関係者に、どうして国際大会を無視して国内のリーグ戦を優先するのかと訊いたら、「東京六大学野球は天皇賜杯を争ってるんだぞ」といわれました。いまでは、東京六大学に天皇杯が出ているということを知らない人も多いし、サッカーの天皇杯に較べて、いかにも規模の小さい大会が特権的に所有しているので、関係者も声高にいわなくなったようですが……。

山本 八四年のロス五輪に出るとき、僕が最後まで抵抗を食ったのは、学生野球だった。「JOCや体協に入ると官僚の支配を受ける、それは戦時中の野球統制令の二の舞だ」というんだ。時代が違うということがわからない(苦笑)。僕も体協のあり方には批判的で、あれは役人の巣窟だと思っているけど、オリンピックに出るのは国の予算を使うことだからね。「官僚の統制が気にくわんのなら堂々と会議に出て発言しなさい。役人に対し、スポーツの振興はこうあるべきだ」と。それをいわないで陰でぶつぶついってもしかたない。まあ、そんなこんなのあげく、今では大学野球も一緒になって足並みを揃えてくれてます。

――去年の台湾でのワールドカップでは、高校生の寺原投手も参加しました。

山本 あれだって僕ともう一人が同意見で……。最初は皆さん反対したんだけどね。最後には、若者こそ出すべきだ、ということをわかってくれた。少しずつは変わってきてますね。遅々とした歩みだけど。

――東京六大学が、今も天皇杯を持ってるのは改革の対象にはなりませんか？

山本 う～ん……。その発言はどこからも出ないね。たしかにサッカーの天皇杯に較べたら規模が小さいかもしれないけど、過去の歴史の結果だから。いまさら天皇賜杯をどうしようとか、どの大会に与えるべきだとか、そういう考え方をしなくてもいいんじゃないかな。

社会人野球はどうなる

――高校・大学野球にも問題は山積みですが、社会人野球は、長引く不況で存亡の危機といってもいい状態で、一日も早くJリーグのようなクラブチームの集団に改革されたほうが……。

山本 おっしゃるとおりです。バブル崩壊の前から、僕もそう思っていた。ウチの組織(日本野球連盟)の前身を遡(さかのぼ)っていただければわかりますが、かつて昭和初期には、東京クラブとか大阪クラブとか、クラブチームがたくさんあった。当時はプロ野球がなく、主に大学を卒業した野球選手は、そういうクラブでプレイしていた。ファンもそれに関心があって、都市対抗野球を見に来ていた。

その人気がどんどん出てきたら、昭和一二、三年頃に藤倉電線が自社の宣伝目的で企業野球をやり始めた。その頃からですよ、宣伝だけでなく、労使協調とか労働者の福利厚生としてスポーツを企業

玉木 改革に対する最も大きな抵抗勢力はプロ野球ということに……。

の中に取り入れたのは。当時はそれでよかったんです。スポーツの発展にもつながった。でも、一企業のエゴが入ってくることで、スポーツ全体の発展が阻害されるケースも出てきた。オリンピックの日本代表チームなど、企業スポーツ中心だけでは組織できません。そしたら、バブルがはじけて、多くの人がスポーツ界をどうしようといいだした。

――バブル経済崩壊は、ある意味でスポーツ界が自立するチャンスなのでは？

山本 僕もそう思った。

――しかし、一気にJリーグのような組織に改編するのも困難ですよね。

山本 東芝、日立、松下、トヨタ、三菱、ホンダあたりは、まだ単独の企業チームを持っている。それは企業としてまだメリットがあるからですよ。今のところ、僕は、そういったチームまでクラブチームになれという気はない。それと既存の野球愛好者たちのチームがある。それも急いで変える必要はない。

ただ、運営の難しくなった企業チームなんかで、地域に密着した新しいチームを組織できるはずです。将来的に伸びるのは、そういうチームのグループですよ。新日鐵が、鉄が不況で野球部の存続が危ういというので、千葉県の君津市と一緒になって、新しい野球チームを作ろうとしている。おそらく年内にはできます。奈良県でも二つの都市が一緒になって企業チームの受け皿を創ろうとしている。日本鋼管と川崎製鉄の野球部が一緒になって、倉敷あたりをフランチャイズにして新チームをつくる動きもある。北九州や仙台でも、そういう動きがあります。こういう動きが実を結ぶのには何年かかるけど、いずれは、こういうチームがプロと合体したり、プロのチームがこういう地域密着型になったりして、プロとアマが融合していかなきゃいけないはずです。

――かつて大昭和製紙白老の野球部が廃部になったあと、ヴェガ白老という町営のチームが受け皿になりましたが……。

山本 それが結局ダメになったのは、新しい選手を採用できなかったから。若い選手でプロに行かない連中を獲得するシステムと、給料を払える財源。これを確立できなかったから、大昭和の選手が歳をとるとチームが弱体化した。君津市の例では、市で何人かの面倒を見るとか、選手の保証を分担するはずです。

――ラグビーでも、新日鐵釜石が釜石シーウェーブRFCとして市民クラブとして再出発しましたが、ラグビー協会は、どうも大学や企業のほうに目を向けて、支援が弱いように思えるのですが。

山本 野球界とラグビー界は、どっちも、考え方の古さでは最右翼だから(笑)。ただ、地域密着のクラブチームが最も将来性があるんだということを一人でも多くの人が認識すれば、徐々に変わっていくと思う。その意味で、いちばん大事なことは、意識改革だな。野球人の。プロの組織も、アマの組織も、野球に携わる人間が、我田引水にならず、野球界全体を盛んにしよう、という意識をどこまでもてるか……。

本気で改革すべきプロ野球

――そこで、改革に対する最も大きな抵抗勢力はプロ野球ということに……。

山本 そこですよ。プロとして野球でメシを食っていくためには、ファンに愛されないといけないのに、自分だけマスターベーションして「面白いから来いよ」というような態度ではダメ。入場料は高いし、午後六時プレイボールだなんて、誰が見に行けますか。アメリカのように仕事が終わって家に帰ってから出てこれるくらいでないと。もちろん試合時間は短くしないと。テレビが試合終了まで放送しないというのもおかしい。

いっぱい変えるところはあるはずだし、野球を面白くしようと思うなら変えられるはずなんです。そして組織的には、一つの企業におんぶにだっこではなく、いくつかの企業を株主にして、東京ジャイアンツや大阪タイガースといった具合に、アメリカ大リーグのようなフランチャイズ制をはっきりさせないとダメですよ。そして、プロもアマもない、一本化した組織作りを目指さないと。

――そうなればいいですが、高校野球を朝日、毎日が牛耳っているように、プロ野球は読売が支配している現状では……。

山本 近々ナベツネさん(渡邊恒雄ジャイアンツ・オーナー)に会うから二年おきに読売と毎日(スポニチ)がやってる日米野球なんて、もう、やめては、というつもりなんだ。アメリカ・チームは、ただ金になるからくるだけで、日米決戦でも何でもない。向こうは本気に考えてない。本気で考える場は、オリンピックとスーパー・ワールドカップ(メジャーリーガーを含むプロの国別対抗世界選手権)しかない。

日本も、本気でそれと取り組むべきなんだ。アメリカ人は自分たちの野球を「ワールドシリーズ」と称して「世界ナンバーワン」と自認してる。それに対して、日本がメジャーリーグの二軍のような存在にならないためには、メジャーと対抗するオーガニゼーションを東洋につくるべきなんだ。「ウェスト・パシフィック・リーグ」でも何でも名前はいいから、日韓台豪でリーグをつくる。地球を東西に分ける二大リーグをつくらなきゃ。それを日本人ができなくちゃダメですよ。巨人が勝ったとか負けたとか、そんな問題じゃないんだ。今のプロ野球の問題は。

――プロ野球界はそこまで頭が回らず、一リーグに再編成しようという声も聞きます。

山本 パ・リーグには巨人がいないから、テレビ収入が少ないことは目に見えてる。そこでチームを十にしてとか、八つにしてとか……。どこに発展性があるのでしょう。既得権を守るため、組織を縮小化するだけ。むしろ一六くらいに増やす案でないと。改革をするというなら、ア

山本 ファンに愛されないといけないのに「面白いから来いよ」ではダメ。

メリカのメジャーに対抗する国際リーグしかない。

——何年計画くらいでお考えでした？

山本　二〇〇三年にはやってやろうと思って。スーパー・ワールドカップの第一回大会の開催と同時に。けど、甘かった。日本の球界は、そんな考えを受け入れようとしない。

——なぜでしょうね？

山本　リスクを背負いたくないのかな。

——そもそも仕事をしたくないんじゃないでしょうかね。黙って机に座っているだけで月給がもらえてるわけですから。

山本　発想がお役人的というか、前例がないことを嫌うのはたしかだな。

——先ほど話に出たスーパー・ワールドカップですが、二〇〇三年から始めて、四年に一度の開催は可能なんですか？

山本　フロリダで第一回大会を開催し、第二回が日本と予定してたんだけど、テロが起きたでしょう。それ以来、計画は完全に頓挫している。今年のメジャーのオールスター戦のときに、アメリカへ渡って話し合うけど、まず無理かな。

——それは非常に残念ですね……。

山本　一九九八年に、僕がメジャーの関係者と話し合って、今のアマチュアと一緒のワールドカップではダメだ、それはそれでアマチュアの育成には役立つけど、トップ・プロの大会が必要だといって、スーパー・ワールドカップと名付けたんだ。ヨーロッパの連中は、優れた選手も少ないし、やっぱりオリンピック中心の考えだったけど、とくに反対せず、メジャーの選手会長やコミッショナーも賛成して、「一回目はアメリカで開催するから、次はおまえのところでやれよ」「当然だ」という会話もしたんだ。それで僕は、予算まで組んでみた。ところが、日本のプロ側がまったく反応しなかった。そのときは、本当にがっかりした。

——なぜでしょう？

山本　「また山本がいいだした」というので嫌なのかもしれんなあ(笑)。まあ、プロのコミッショナー以下、球団のトップの人たちは、国内の勝ち負けで精一杯なんですな。ただ、まあ、プロとして大きく発想を変えて、運営から根本的に見直さないと、といった具合に、僕はプロの関係者にも率直にいうんですが、「山本さん、アマのなかにも高野連など何もわかってないのがいるじゃないか」といわれるのが弱い(笑)。でも、今にアジアでも、韓国、台湾だけでなく、中国がプロ野球リーグをつくるでしょう。

——プロ・サッカー、プロ・バスケットボールはすでにできてますね。

山本　まだ、ちょっと指導者が少なかったり、二〇〇八年の北京オリンピックでもマイナーな存在で、時間はかかりそうだけど、いずれ強くなる。それも視野に入れた改革を考えないと……。

野球を運営できる野球人を

——日本のプロ野球界は、野球人がヘゲモニーを握ってませんね。野球経験者でない人、野球を好きでもない人、野球を知らない人に、野球選手や監督が利用されている状態です。

山本　まあ、野球人だけで運営するといっても……。経営的な思考力のある人、オーガナイズしたりプロモートする能力のある人は野球人には少ないですよ。

——サッカーの川淵チェアマンは古河電工の取締役で、日本代表選手も監督も務めた方ですし、フランスW杯の監督の岡田武史さんも、古河電工ではプロジェクトチームの優秀な一員だったそうです。

山本　野球の、打った、投げたが好きで、プレイの現場ばかりにいた人間は、そういう運営とか経営面のことを考えるのが得手ではない。長嶋君も、そうだな。それでは、まずいんだが……。

——高校野球の影響があるのでは？　教育を標榜しながら、じつは野球しかできない若者を大勢育てている。

山本　いやいや、それは……、さあ……あるなぁ(笑)。

——今年からタイガースの監督になった星野さんとか、選手会長の古田とか、ナチュラルな思考力と実務能力に長けた人材もいますが、少ないですよね。

山本　星野君と古田君には、僕も将来、期待していますよ。いろいろな意味で。

——プロ野球関係者は、球界の改革にも国際的な動きにも鈍感なのに、アテネ五輪だけは熱が入ってるようですね(笑)。

山本　長嶋監督のことね(苦笑)。あれは、ジャイアンツよりもメディアのほうが浮ついて先取りしていると思うな。僕だって、たしかに長嶋君のあの明るい性格と人気は素晴らしいと思うから、日本の球界にとって必要だし、使い方があると思いますよ。でも、誰も、何も決めてない。なのに、メディアが、監督だとか、総監督だとか、勝手に辞令を出すんだから(笑)。あの報道のやり方はおかしいと思うな。読んでる人が、また、そういう話が好きだから。新聞は株式会社ですから、売れればいいってわけで、ひとつもポリシーがない。

——アテネ五輪の監督は古田のほうがいいんじゃないですか？　純粋にメダルを狙うなら。オリンピックの経験もあるし。

山本　その質問には今は答えられない(笑)。でも、プロもアマも考え直さなければならない時期に来ている。アマチュア野球の関係者のなかにも、まだ「俺たちの野球はきれいだ。プロは金儲けで汚い」なんて思ってる人がいるんだから。

——そんな人が、まだいますか？

山本　いる。時代は変わったのに。政治も経済も、すべてが変革の時期に来ているのに、野球界だけが旧態依然のままなんて、絶対に通用しない。そんなことでは、日本の野球人気がなくなり、野球人口が減り、少子化とともに、日本の野球は本当に滅びますよ。

若輩者には口幅ったい言い方になるが、長老は、きわめて「正しいスポーツ思想」の持ち主だった。が、「ドン」と呼ばれたほどの人物でも、その「正しいスポーツ思想」を実行に移すのは並大抵のことではない。

ならば、日本の野球界を「正しい姿」に改革できるのは、いったい誰なのか？　誰が、日本の野球界を支配しているのか？　その人物の名前は、誰もが知っている。まったく残念なことに、その人物は、野球を愛していない。野球よりも親会社の経営に熱心で、野球はその道具にすぎない。つまり、日本野球は「植民地化」された状態にあるのだ。

もっとも、植民地は、いつか必ず独立する。その日が来るのは、そう遠くないと思いたい。